

子どもと出会う(11)

ことばを育む環境とは

岩田 純一

ことばの発達は、日常の生活体験やそれをもとにしたやりとりのなかで生じる。だからこそ保育における言語環境が重要になってくるのである。そこで、子どものことばを育む保育の環境について考えてみたい。

保育者は外界の関心や興味を子どもと共有しながらやりとりする。そこでは、子どもからの表現を

しっかり受けとめ、その表現から子どもの発話意図を共感的に汲み取り、そのときに子どもが求めていることばで適切に応答するといったことが重要である。このことは、今までの言語発達の研究からも明らかにされてきた。それは、保育者が、子どもにとって「よき聞き手」「よき話し手」になる必要性を示唆するものであろう。たしかに、そのようなこ

とばの環境が重要であることは言わずもがなである。そこで、ここでは、それとは少し異なる観点から、ことばを育む保育環境ということについて考えてみたいと思う。

ことばの豊かさ

子どもへの「豊かなことばかけ」は、保育の場でお題目のように唱えられる。それでは、豊かなことばかけとは一体いかなるものなのであろうか。しかし、その内容はあまり吟味されたことがなく、あいまいなままである。

しばしば、豊かなことばかけはことばの多さと同義に受けとられてきた。もちろん、ことばかけが貧弱で不足しては、ことばを育むにもよい環境とはならないであろう。しかし、ことばかけが多ければ、それで豊かな言語環境になるというわけではなさそうである。保育者のことばかけの多さは、とき

として子どもにとつては不必要に余分なことばかけになるからである。

年長児になつても、保育者がじぶんの喉をからすような保育をみることがある。子どもたちの喧騒、それを追いかけて「くちゃん静かに」「聞いて」「ダメでしょ」「ををして」と、叱り、注意することばが飛び交う保育である。一見すると、子どもは活発であり、保育者のことばかけも豊かに映る。しかし、このような保育者のことばかけは子どもにとつて豊かなものになっているのだろうか。否である。「静かに」「ダメ」「やめなさい」と、不快なことばの投売りであつて、そのことばさえ騒がしい子どもの声にかき消される。さらに余分な声を張り上げることになつてしまう。まさに不必要な余分なことばである。また、子どもは静かであるが、保育者がのべつまくなしに口うるさく指示し、それに従つて一糸乱れず行動させるといった保育に出合うこともあ

る。これも、一見すると整然としたよい保育のよう
にみえる。しかし、そのような指示的ことばかけは
子どもにとって豊かなのであろうか。これも否では
なからうか。保育者のことばが、子どもの能動性を
奪い、指示待ちの子どもを生み出してしまうことに
もなりかねない。これらは、保育者からのことばか
けは多いとしても、いずれも子どものことばの育ち
にとつては不必要に余分なことばであるように思え
る。そのような不必要な饒舌さは、むしろ子どもか
らのことばの表現を奪ってしまうように思われる。

必要に余分なことば

このように、豊かなことばとは、決して保育者の
余分なことばの多さとイコールでもなく、保育者の
声だけが目立つことでもない。しかし、子どものこ
とばの育ちにとって必要に余分なことばがあること
も指摘しておかねばならないだろう。それは、一見

すると無駄口ともみえるが、ことばによる会話その
ものを楽しむようなやりとりである。たとえば、年
中児にもなると子ども同士が井戸端風の雑談をして
いるところによく出会う。耳を澄ますと、仲間とじ
ぶんの体験や出来事を話し合い、比べ合ったりし
て、じつに生き生きとしゃべりあっている。これは
保育(者)にとつては余分なことばかもしれない。
しかし、じぶんの体験を話し、仲間の話に耳を傾け
るといった楽しいやりとりが、じつは子どものこと
ばの育ちに思いのほか大きな影響をもっているよう
に思える。まさに同じことが保育者とのやりとりに
おいても言える。子どものことばは、保育者が子ど
もと楽しい雰囲気を共有しながら、ことばのやりと
り自体を遊びとして楽しむといったなかで育つてく
るのではなからうか。ことばでのやりとりの楽しさ
が、ことばの表現を学び、表現意識を形成していく
基盤になるように思える。

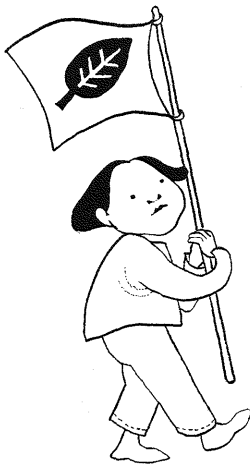
このようなことばが、子どもにとって必要な余分のことばである。不必要に余分なことを充滿させるのではなく、保育者と子ども、子ども同士が楽しいおしゃべりを交わせるような保育の場作りこそが、子どもにとって豊かな言語環境になるのではなかろうか。

もう一つの言語環境

保育者のことばかけが子どものことばを育む上で影響力をもつことは言語発達研究からも示唆されてきた。なるほど、ことばの育ちにとって、保育者のことばのかけ方や、子ども同士のやりとりが重要になる。しかしながら、そこではいずれも、対人的な言語環境に焦点が当てられてきた。その一方で、物理的な保育環境が子どものことばの育ちに果たす役割については、ほとんど言及されてこなかった。しかし、ことばとは直接に関係なさそうな物理的な保

育の環境が、じつは子どものことばの育ちにとって重要な役割を果たすのである。

子どものことばは他者とのやりとり（相互交渉）のなかで育まれていく。すると、そのような言語的やりとりを活発にする環境の設定が問題となってくる。それはまさに、物理的な場の環境設定なのである。保育の場の教具やおもちゃの置き場所、部屋の配置といった物理的な環境設定を変えるだけで、子どもの活動、子どもと保育者のかかわり、子ども同士の相互交渉に変化をもたらす。そのことが、ひいてはことばでのやりとり環境を変えていくことにも



なるのである。

(1) 保育者の位置

保育のなかで保育者がどの位置に立つかということとは重要である。ある園の年長児クラスで、子どもに新聞の写真をみせながら、その内容について子どもたちとやりとりするといった実践をしていた。子どもたちの椅子は、保育者の位置から逆U字型に配置されている。その結果、保育者の対面にいる子どもには遠くて写真がはっきりみえない、側面の子どもは斜めでみえにくい。そのなかの何人かが「みせて、みせて」と、席を立てて前に出てくる。それがほかの子どもの前をふさいで、「みえない」と文句が出る。保育者は「静かに」「席に戻りなさい」「前に出てきたらダメでしょ」と声を張り上げる。新聞の写真をめぐってのやりとりどころでなく、まさに命令、注意、説教といった不必要に余分なことばが

必要になってしまったのである。この事態は、保育者の前に子どもを扇型に配置すれば起こらなかったことである。

保育者が子どもたちのなかでどのような位置に立つかということは、保育実践にとって、とても大切である。その位置取りが悪いため、多くの子どもの行動やことばがみえてこない、聞こえてこないといった保育をしばしば目にするができる。せっかく子どもが話しかけているのに気づかないままでやり過ぎしたり、子どもの様子がみえなかったままにトンチンカンないざござの仲裁をしたり、といったことにもなる。それでは、子どもの言動をしつかり捉え、それに適切なことばかけをする機会を逸してしまうことにもなる。保育者の位置取りの不適切さによって、保育の流れが中断されてしまったり、子どもには不必要に余分なことばかけが必要にもなってしまうのである。その意味では、子どもの間

に立つ保育者の位置は、一見関係がなさそうにみえて、子どものことばの育ちにとって重要なのである。

(2) 空間の配置

家屋や建物の間取りによって、そこに住まう人の流れが変わってくる。動線が変わってくるからである。このことが住まう家族や成員間の人間関係にも大きな影響をもってくるのである。空間の構成や配置が、人の流れや購買行動に影響をもつことは、すでにデパートやスーパーマーケットなどでは常識となっている。商品の空間配置（どのように陳列棚を配置し、どこに商品を置くのか）が、その売れ行きにも大きく影響するのである。

保育空間の構成や配置についても同じことがあてはまるが、そのような保育環境の重要性はこれまであまり指摘されることがなかった。しかし、おも

ちゃの棚を保育室のどこに置くかによって、おもちゃの利用のされ方が違ってくるのである。ある園で体験した事例をあげてみよう。

玄関を入ると正面の廊下にベンチが置かれている。その廊下を少し行くと廊下に面して絵本コーナーの棚があり、その下には子どもが座るためのアーチ型になったベンチが作りつけてある。しかし、その一端には大きな陶器製の飾り物が占領している（図1―次頁）。子どもたちの動きをみていると、ベンチコーナーで絵本を読んでいる者はほとんどいないようである。そこで空間配置の変更を提案してみた。まず座って本を読むには邪魔な飾り物を移動し、正面の廊下にあったベンチをアーチ型のベンチに廊下をはさんで対置したのである。そしてベンチにはクッションを置いてみた（図2―次頁）。すると子どもたちが集まり、ベンチに対面して座りながら一緒に絵本を読み始めたのである。これは、

たんなるもの珍しさによつたのではなさ
 そうである。その証拠に、後日の報告に
 よると一時的な変化ではなかったとい
 う。このように、ちょっとした環境の変
 化によって、それまであまり利用されな
 かった絵本コーナーが子どもをひきつ

け、一緒に絵本を読みながらやりとりす
 る場になったのである。そのような場の
 変化は、子どもも相互の言語活動を促し、
 ひいてはことばの育ちに影響していくこ
 とになるのである。

同じときに試みたもうひとつの配置変化をみてみ
 よう。子どもが通る廊下の途中に五脚ほどの椅子と
 テーブルが、坪庭に面する形で横並びで配置されて
 いる(図1)。廊下を通る人を見つめるような形で置か
 れているのである。おそらくは、子どもたちがそこ
 に座っておしゃべりするために置かれたものである

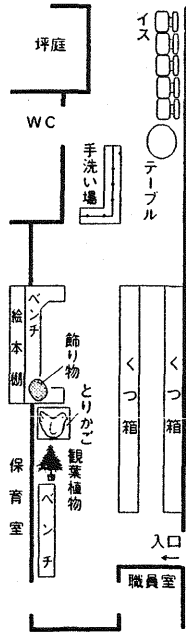


図1 最初の配置

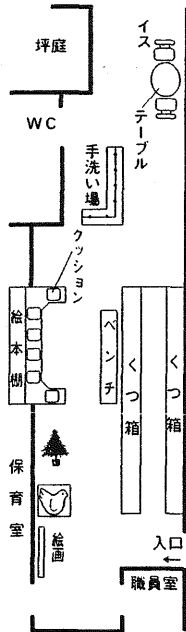


図2 変更後の配置

う。傍でじっとみていると、子どもたちは椅子に座
 らないで素通りしていく。そこで、配置を換えてみ
 ることを提案した。それは、いくつかの椅子を除
 き、テーブルに花瓶をのせ、それに向かい合わせて
 椅子を置いてみたのである(図2)。しばらくする
 と、それまでは見向きもしなかった椅子に座りなが

ら子どもたちがおしゃべりを楽しんでいるではないか。

このようなエピソードをみると、保育者は子どもの視点に立ち、なぜこのような物の配置をするのか、それは子どもにとってどのような意味をもつかを、たえず想像しながら環境作りをしていくことが求められる。それは、子どもが環境へ能動的にかかわり、子どもたちが活発に交わられるような保育の場を想像（創造）していくことにはかならない。そのような場作りこそ、子どもの言語活動を促し、ことばの育ちをもたらししていくことにつながるのである。

「ことばの指導」というと、生活発表をさせる、あいさつことばをしつける、ことば遊びをする、文字に興味をもたせる、絵本を読み聞かせる、といった活動を思い浮かべる。もちろん、それらは重要な活動である。しかしながら、言語指導やその環境は

もっと広い観点から捉えられるべきである。保育の場に立つ保育者の位置取り、園の物理的な環境作りといった要因も、子どものことばを育てるもう一つの間接的な言語環境として重要な意味をもってくるように思われる。その気づきこそ、保育者が子どもにとって豊かなことばの育つ環境を準備し、ことばを育てる保育実践の要件となるのではなからうか。

（京都教育大学）

注 本稿は、日本国語教育全国大会（一九九七）の幼稚園・保育所部会のシンポジウムで筆者が発表した内容をもとにしている。なお本文中のエピソードは、筆者と岩田陽子（モンテッソーリ教育研究者）の共同によるものである。